

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
 大学院生研究
 2003年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学	研究科	日本文学	専攻
指導教員	所属・職名		氏名		
	文学部・教授		石崎 等 印		
自然・人文の別	自然	<input type="checkbox"/> 人文	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人	共同 名
研究課題	太宰治を中心とした昭和十年前後の文学シーンと小説表現—メディア論の視点から—				
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	文学研究科・日本文学専攻・博士課程後期課程3年		松本 和也 印		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
研究期間	2003		年度		
研究経費	200		千円		

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究では、昭和十年前後の文学をめぐる諸問題を研究対象として取り上げた。
 まず、研究課題の副題にも掲げたように、メディア論という視点を導入することで、同時代の様々な問題系と交錯する文学という領域を捉える視座を確保し、その上で過渡期（転形期）である昭和十年前後の小説表現から、太宰治の作品を研究対象として選び、3つのプログラムを通じた分析・記述を目指した。
 具体的には、太宰治の小説表現から「思ひ出」及び「HUMAN LOST」の再検討を、さらには様々な小説家・批評家によって議論された描写論をテーマに据え、メディア論という観点を組み込んで考察した。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[太宰治] [昭和十年前後] [メディア論]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、「研究の概要」にも示したとおり、3つのプログラムからなるので、以下、それぞれのプログラムごとに、その成果をまとめておきたい。(なお、前2者については、「研究発表」に記載した論文に詳しい。)

I 太宰治「思ひ出」

まず、太宰治の「思ひ出」というテキストを扱うに際して、その小説表現を読む(分析する)という姿勢を担保した上で、テキストをめぐる複数の問題系に目配せをすることで出発した。具体的には、小説表現に書き込まれた様々な歴史的な事象をとりあげ、それが、当時それぞれどのようなコンテキストをもつものであるか、さらには、それらが小説表現に刻まれることで、小説そのものの読みないしは価値はどのように形成されることになるのか、というのが1点で、ごくごく大雑把な言い方をあえてするならば、「ポスト・コロニアル批評」とでも呼ぶべきものを展開した。もう1点は、「思ひ出」というテキストが、現実的に発表されたことに関する諸問題である。それは、発表誌(同人雑誌)の詳細やそれをめぐる回想、さらには、それらをいささか抽象した形で「故郷」というテーマを論じた。

この一連の作業を通じて、これまで太宰治という作家の魅力もあって、自伝的小説と目される傾向が強かった「思ひ出」というテキストの歴史的な位置を問い直し、そこから、小説の読解へと向かうことになった。

小説を読むに際しては、メディア論的な観点からの「読者論」、つまりは読み手の位置への配慮をしながら、文学研究において培われてきた様々な「技術」を援用し、さらには、「思ひ出」を今日読んだとき、もっともクリティカルな1面である、「記憶」という問題を前景化して議論を展開した。

その結果、「思ひ出」は、単なる思い出の記などでは決してなく、メディア・歴史の渦中に書かれ、多くの文化的事象を取り込みながら、さらには読み手の読みの「位置」を揺さぶるような、非常にダイナミックな、小説表現であったことを論じた。

II 太宰治「HUMAN LOST」

「HUMAN LOST」というテキストは、太宰治のそれの中でも、難解さをもって知られるものである。それゆえに、これまで安易な解釈枠組みが採用され、十分な検討がなされてこなかったテキストである。本研究においては、「HUMAN LOST」のこれまでの研究成果をまとめることから出発し、しかもそこから、「HUMAN LOST」の読み方・分析方法自体をも析出し、それらを生かし「日記体小説」という形式への配慮をしながら、その小説表現の、特異点をていねいに論じた。そして、その「言語論的位相」にまで論及し、そこに見られる、言葉なるものの機能を逸脱したかのようなあり方に注目し、そうした形式が同時代(昭和12年)に持つ意味を探るという作業に向かった。

そこで具体的な同時代言説として分析対象としたのは、同時代において支配的な編成をとることになる〈日本的なるもの〉である。もちろん、〈日本的なるもの〉についての言説はそれぞれに異なるものであるが、広範なメディア調査に基づく詳細な分析をへて、その形式構造の類別が可能となった。

議論としては、「HUMAN LOST」の小説表現を、〈日本的なるもの〉を背景として読むことで、炙り出すという試みに向かった。そこから明らかになったのは、「HUMAN LOST」が、太宰治なる作家その人への興味だけでは決して読み解けないものであるということである。なぜなら、それは実生活上の危機ではなく、小説表現における「言語表現上の危機」なのであり、作者の実体験に基づいた読解は、同時代の歴史(〈日本的なるもの〉)を見えにくくしてしまう怖れが多分にある。そのことをポジティブに語るなら、「HUMAN LOST」というテキストの強度は、それが同時代の〈日本的なるもの〉批判でありながら、さらには原理的な「表象」への疑義を、小説表現それ自体において担う点にあったことを論じた。

III 昭和十年前後の描写論

このテーマについては、描写論を照準しながらも、まず、小説表現(描写)そのものを注目することから出発してみた。具体的に読み込んだのは、武田麟太郎・高見順・太宰治を中心とした、昭和十年前後に発表され

研究成果の概要 つづき

た小説表現である。これらの多くが、いわゆるリアリズムの描写に反発し、それぞれ独特の文体を獲得していることが明らかになり、ねらいとしては、それぞれの特徴を、マクロ/ミクロに分析するために、具体的な検討対象テキストを絞り込むと同時に、同時代の描写論（リアリズム論）の理論的布置の検討を目指した。前者については、後者との相関関係もあり、まだ絞り切れていないが、候補となるテキストは、小説表現や媒体を考慮していくつかに絞られつつある。また、後者については、後代における描写論というテーマについての先行研究の調査・分析は終了しており、それらも参照しての、同時代のメディア言説（雑誌・新聞記事）の調査ならびに収集もほぼ終了した。現段階では、はっきりした展望を述べるのは難しいが、おおよそのところ、それが単なる文学表現上の技術の問題に留まるものではなかったことは明らかになったとあってよい。

今後は、以上の成果を再吟味しながら、複数の要素を論じる論理を構築し、必要があれば追加調査等もしながら、論文化を目指すことになる。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版者、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

①

松本和也「言語表現上の危機／批評——太宰治「HUMAN LOST」試論」、『文芸研究』、第155集、平成15年3月、P.23-35

松本和也「太宰治「思ひ出」の^{ロケーション}位置」、『立教大学日本文学』、第91号、平成15年12月、P.90-102

* なお、前者については、雑誌刊行の遅れにつき、採択年度・研究期間との間に年月表記上のズレがでていたため、末尾に研究費成果である点を記載しなかった。この点については、助成課にメールにて問い合わせ・確認済みである。